

大阪 深江 探訪

ふかえ・たんぼう

摂津國笠縫邑「深江」のんびり巡る

FSP 深江創生プロジェクト

深江ってこんなまち

深江は東成区の東部に位置し、まちの東端は東大阪市に隣接しています。古来より摂津笠縫邑と言われ、菅笠の産地として有名で、伊勢神宮式年遷宮、大嘗祭には大菅笠を納めています。

この地は暗越奈良街道に沿っており、江戸時代にお伊勢参りが大流行した時期には旅の道中に「深江の菅笠」を買いためる人々で賑わいました。そうした謂れから現在では『旅立ちのまち』として知られ、神社仏閣などの歴史文化遺産も多く、白壁や土蔵の街並みなど落ち着いた佇まいを残しています。

1 暗越奈良街道 新道標

暗越奈良街道が深江では昔の摂津と河内の国境に約300mほど往時の佇まいのまま残っている。地元で産業道路と呼ばれている府道24号線拡張工事の際にバイパス道路を通したため残った。訪れる人のため、新旧の道が分岐するポイントに新道標が建てられた。



2 深江稻荷神社

『大和の遠い祖先の思いを受け継ぎ、この地でものづくりに挑み続ける人々を見守ってきた神々の社』

大和笠縫邑に皇祖の御鏡を守護していた笠縫氏の一族が菅草の生い茂ったこの地に移り住み、下照姫命を祀った。第11代垂仁天皇の頃である。また、一族は鋳物の技術を持ち、鍛冶の祖神の天津麻羅命を祀ったので鋳物御祖神社とも呼ぶ。社殿を1614年大坂冬の陣の戦渦で消失するが、1761年には再興する。

現在の社殿と拝殿、社務所は平成5年に建て替えられた。夏祭りには、菅の縁起物付の笛もあり、菅の輪ぐりもある。祭礼は大勢の人で賑わい、11月28日夜【火焚祭】(ふいご祭り)には雅楽・人長舞が奉納される。境内には銀杏と楠の大木がそびえ立ち、鳥居の左後方、昭和47年に大阪府・市の史跡「摂津笠縫邑「深江菅笠ゆかりの地」指定の石碑が建立された。



3 万葉歌碑

～四極山 打ち越えみれば笠縫の島漕ぎ隠る 棚無し小舟～かつて深江の地は入江に浮かぶ島であった。大和川と淀川水系がもたらす土砂により、刻々と変化をとげて大阪平野になった悠久の時の流れを感じてみよう。高市黒人の歌は今も輝きを放っている。



4 人間国宝角谷一圭生家

角谷一圭氏は幼少時から父・巳之助の鋳物作りを手伝い、その後本格的に茶釜の創作活動に入り、芦屋金の再現に取組むため、茶の湯釜の研究に情熱を傾けた。昭和53年に重要無形文化財保持者に認定、平成11年94歳で生涯を閉じた。東大阪の工房は一圭の子、孫に受け継がれている。



5 安堵の辻

法明上人が晩年を郷里の深江で過ごしていた折、賀古の沙彌教信が紫の雲に乗って現れ、「永年念佛を広め人々を救った功により、来年の6月に極楽往生をとげるでしょう」と告げた。上人は安堵され、お告げどおり翌年71年の生涯を閉じた。以来この辻を安堵の辻と呼ぶ。



10 深江郷土資料館

『深江の歴史・民俗・文化等を紹介、様々な展示品と復元した菅田を通して深江の魅力を発信する場』

深江に伝承されてきた菅細工、鋳物工芸を始めとする伝統工芸の保存を目的に2010年にオープン。地域住民が中心となって資料館の管理・運営がなされている。鎌倉時代に作られた茶の湯釜の最高峰とされる「筑前芦屋釜」の復元で知られる人間国宝・角谷一圭氏の作品をはじめ、現在活躍する金工作家達の創作作品や、古代から受け継がれた伝統工芸の菅細工、儀式用の大型菅笠などを展示している。またその技を伝承する為、菅田を復元し良質の菅草を栽培している。深江の歴史を体感していただき、地域の今後のあり方を考える為の機会と場を提供しており、2016年秋に増築し、深江まち巡りの観光拠点となっている。

●開館日:土、日、祝日(年末年始を除く) ●開館時間:9:30~12:00/14:00~16:30 ●入館料:無料



11 段倉

深江はかつて低湿地帯であった。明治18年(1885)6月に未曾有の大洪水に見舞われ、大阪市の大部分は泥の海と化した。深江でも水は天井に届き大被害を受けた。以来大切な品を水害から守るため、石垣で段々に高くした倉を建てて納めた。それを段倉と呼ぶ。



12 島光大神

明治18年大洪水で被害を被ったのを機に地元旧家が水の神(蛇)を祀った。傍らの楠(樹齢約250年)には白蛇が棲むとのこと。



13 妙光寺

本門佛立宗清風寺の末寺である。昭和7年初め、日治上人により教えが広まった。昭和43年に現在の本堂が建立された。



14 光榮寺

真宗大谷派で延宝5年(1677)以前の創建。念仏の教化と地域住民の親睦交流の場として現在に至る。平成4年新様式の本堂落成。

旧街道入ってすぐ左側に道案内地蔵のお堂と道標がある。かつてそこに山門があり、参道が北へ一直線に延びて本堂まで達していた。



6 真行寺

明応年間(1492~1501)の創建という。また慶長16年(1611)の蓮如上人画像と木仏裏書にはいずれも「摂州東成郡深江村」の宛所が記載され、本願寺派の12世門主准如が証判しており、真行寺真宗関係史料として大阪市指定有形文化財となっている。



7 長龍寺

真宗大谷派で正式名称は法雲山長龍寺と言い、ご本尊は阿弥陀如来である。約500年前に建てられたと言われ、当時の鬼瓦は今も保存されている。江戸時代には、寺子屋が開かれていた。現在の本堂、山門、庫裏は平成12年に再建された。



8 伊能忠敬と深江

日本地図作成のため伊能忠敬(第6次)観測隊は、四国沿岸を測量し、1809年1月11日大和路測量に向かって大阪に到着。淡路町から測量を初め、昼前には深江村に到着し、庄屋五郎兵衛(現14代目の川田孝一氏)宅に一行が宿泊し、夜は天体観測を行ったと日記に記されている。



9 法明寺

『混沌の中世にあってこの世の無常に苦しみ出家、念仏を唱え民衆とともにあろうとした法明上人開祖の古刹』

平野大念仏寺で中興の祖と仰がれている法明上人は、幼くして両親と死に別れ、妻子をも流行病で相次いで亡くすという悲運にこの世の無常を感じ出家した。高野山、比叡山と修業を積まれ、ついに弥陀に救いを求め、私財を投じて当地に清原院法明寺を開く。文保2年(1318)境内に雁塚の石塔がある。弟正次が射落とした二羽の雁の親子か夫婦の情愛に深く打たれ、殺生を悔いて手厚く弔ったのち出家したと伝わる。門前の石橋の側面に見える隆光の文字は第22代住職旭隆慧光の父が刻んだ。優れた鋳物師でありながら流れ者同然の生き方を息子に諫められ一念発起、後世に残る作品を数々残した。時は移れど親子に通う思いが偲ばれる。